

学問を見つめる視線―研究の経験をどのように生かすのか―

楊 春 華

一、誤解からもたらされた思考

国際日本文化研究センター（以下、「日文研」と称する）では、月に一度、ランチ・ミーティングが行われている。これは、新しく就任した先生の歓迎会と、また任期を終了した先生の送別会を兼ねていて、日文研にとって重要な行事である。ランチ・ミーティングは、我々外国人研究員にとって、所内の先生方および来訪研究者との大切な交流の場であり、互いの研究をより知るよい機会でもある。

国際交流が盛んな日文研では、外国人研究者が多く見られる。考えてみると、私は二〇一八年四月に日文研に来てから、ほとんどの外国人研究者とこのランチ・ミーティングで初めて知り合ったのである。そのために、毎月のランチ・ミーティングはわれわれにとって、新しい研究者との出会いの貴重な機会であり、毎回欠かさず出席している。二〇一八年度についていえば、六月に就任した研究者がとりわけ多かった。同月六日に行われたランチ・ミーティングでは、その月に赴任された先生方がそれぞれ自分の研究などについて自己紹介をしてくださった。その際、私は新しく就任した先生方の立派な研究内容に集中するあまり、それら先生方の名前がはつきり聞こえなかった。日文研に来られる外国人研究者は、日本を研究対象としているため、日本語ができることは、驚くべきことではないともいえる。にもかかわらず、彼ら・

彼女ら外国人研究者の日本語の堪能さには、感心することが多い。そしてその月のランチ・ミーティングでは、ある一人の「外国人」研究者があまりにも流暢な日本語で自分の研究内容を紹介しているのに驚いて、思わず私は「日本語が上手ね」と隣にいる先生に話した。

ランチ・ミーティングの翌朝、日文研の研究室へ行く途中、昨日日本語が非常に上手だった「外国人」の先生に会ったのだが、その方とお互いの研究内容を話していたときであった。この先生の日本語能力に再び感心し、「先生の日本語は非常に上手です」と伝えた。その「外国人」の先生は、ニコニコしながら「私は日本人ですよ」と答えた。大変失礼なことをしたと実感した。なぜ最初に「外国人」だと思っていたのか。その後、真剣に考えた。それまでのランチ・ミーティングで出会った研究員は外国人が多かったため、このように思い込んでしまったことが要因である。

普段の経験から生じたこの誤解があった後、以前の自分の経験（研究も含め）は、どこまで通用するのかと考えさせられた。すなわち、研究の時間が長くなるにつれて、習慣的な思考や認識は、ものを見る目を鈍らせる恐れがあるのではないかと考えるようになったのである。

二、研究対象の真髓を見出す思考力

研究を通して得られた経験は、次の研究にどのように結び付けることができるのだろうか。この問題に関する思考のきっかけは、日文研の井上章一教授の『京都ざらい』（朝日新聞出版、二〇一五年）を読んだ時のことであった。洛中の人々はどうのように洛外（著者の出身）から来た人のことを見ているのか、著者自身の観察、また身をもって感じたことを描写し、このような見方を引き起こす要因を研究者の視点から深く探っていたのである。みんなが見ているこ

と、またみんなが知っていること、当たり前に見えるものを掘り下げるのは、きわめて難しいことである。井上教授の話によれば、「他人に見ぬけぬ何かを、私がつきとめたというわけでは、けっしてない。誰でもうすうす気づいていたが、あえて書くとうとはしなかった。そういうところに、私の文章は光をあてている。良く言えば、度胸がある、悪く言えば、世間の黙約に気づかない、無神経な書き手であったということか。」（同書、五十六頁）。謙虚な著者はこのように述べているが、その黙約をあえて破って、その内容を人々が納得できる形で明らかにしている、私は思う。

人と異なるものを書くなら、他人より鋭い判断力が必要である。そしてその判断力は、研究者の長年の研究活動の中で培った経験、また研究者の生活体験とも関わっているのである。研究者であれば、過去の研究の継続によって作り上げた枠組みから将来の研究に結びつく研究の構想を立て、また個人の生活体験に新たな社会での体験を加えて判断するといったことの重要性は、誰しも認めるものだが、それを実際に実行するのは、決して容易なことではない。その中であって井上教授は、一つの手本である。

見慣れているところから、そこに隠されているさやかな問題点をも見落とさず、真実を追究していくためには、鋭い判断力を鍛えなければならない。井上章一教授の『京都ざらい』を読み、一層この思いを強くした。

三、研究者の共有の研究経験の活用

二〇一八年五月二〇日から二一日の二日間は、日文研創立三〇周年の記念国際シンポジウム「世界の中の日本研究」が開催された。このシンポジウムは、歴史、古典・言語、舞台芸術、

近現代文学および政治・思想という五つのセクションからなっていた。各国から集まってきた研究者は、それぞれのテーマをめぐって、研究発表をしていた。発表内容は、五つの大きな研究領域に分けられていたが、それぞれに共通したテーマとしては、日本研究というキーワードがあった。社会学の視点からみれば、研究者の研究領域は異なるわけだが、発表した内容、また研究方法などにおいては、何らかの形で社会学と関わっているように思われた。私は、このシンポジウムが、研究領域を超えた研究者たちの集いであると思い、二日間の研究者たちの発表から、研究に関する多くの示唆を得られた。

日本研究というキーワードのもとに、それぞれの研究領域において、それぞれの研究経験から立派な研究成果が発表されたことは、日本研究が広範囲で、かつ高い水準で進んでいることを表わしている。研究領域が異なるにもかかわらず、学問に対する解釈にはじまり学問の対象を見つめる視点に至るまで、私にとって収穫が多かった。研究者の共有の研究経験は、一つの研究ネットワークによって繋がっている。このネットワーク作りこそが、研究という経験に魅力を与えるのである。

研究において、研究者個人が研究を通じて得られた経験の限界をいかに突破できるのか。研究者が研究会やシンポジウムといった研究を共有する場に参加することは、そうした限界を外の世界へと押し広げてくれる、一つの有効な方法であると思われる。研究のネットワークの形成、研究領域を超えるチームの形成の必要性、さらに国際的な連携による研究は、非常に重要である。

多くの立派な研究者が集まる日本国際文化研究センターでは、頻繁に行われる研究会が重要な学習の場になると思う。研究会への自由参加の伝統、また研究会での自由な議論の雰囲気な

どを通して、より視野を広げ、より認識を深め、今まで見慣れてきた自分の研究に対する思考をさらに深めることができた。他の多様な背景をもつ他者と共有することを、どのように生かすのか、学問の対象を見つめる能力を鍛えることは、一生の仕事だと思われる。

（南開大学周恩来政府管理学院准教授／国際日本文化研究センター外国人研究員）